

換喩と名詞述語文

——措定文の述語名詞に換喩は生じるのか——

大田垣 仁

1. はじめに

一般に換喩は「ある対象をそれと密接な関連のある別の語で表す修辭的技法」と定義され、主に文中の名詞句の指示的位置¹に生じる。一方、Ruiz de Mendoza and Hernández (2001)によると、換喩には「A is B」型の名詞述語文の述語名詞に生じる非指示的な用法 (e.g. “She is *a real brain*.”) があり、これを換喩の叙述的用法 (predicative use) とよび、典型的な換喩の用法から区別している。また、この用法に類似した日本語の言語現象として、澤田 (2003) が指摘する、属性叙述文で部分属性をあらわす述語名詞に意味の拡張が生じる現象 (e.g. 「彼は面長だ」 「彼は真冬でも半袖だ」) がある。本稿の目的はこれらの、述語名詞に換喩が生じているといわれる言語現象が、拡張的な指示の拡張をもつ真性の換喩と同一の現象であるかどうかをメンタル・スペース理論 (Fauconnier 1985, 1997) の道具だてによって検証し、日本語の叙述的な名詞述語文の述語名詞に生じる換喩の成立可否についての基礎づけをおこなうことにある。そのために、「A は B だ」型の名詞述語文 (i.e. 措定文、倒置指定文、間スペース解釈、ウナギ文) をメンタル・スペース理論の道具だてをもちいて整理したうえで、名詞述語文の述語名詞に換喩が生じる際の日本語と英語のちがいをあきらかにする。

2. 言語現象の観察

換喩をあつかう研究がしばしばあげる換喩の定義はおおむねつぎのようなものである。

¹ 名詞述語文をのぞく、文中の主語や目的語の位置。名詞述語文のばあいは、措定文の主題、倒置指定文の述語、指定文の主語、間スペース解釈 (= 同一性文) の主題と述語の位置である。

(1) ある対象をそれと密接な関連のある別の語で表す修辭的技法(田窪 1992 : 29)これに対し本稿では、換喩をこのようなひろい定義ではなく、名詞句の指示の拡張というより厳密な定義によって基礎づけるべきであると考えている。そのために、本稿では換喩をつぎのようなメンタル・スペース理論の枠組みによって再規定し、この定義を基盤とした分析をおこなう。

(2) ある限定された状況において、語用論的コネクターを介して、ある対象が属するカテゴリーとは異なるカテゴリーをあらわす名詞でその対象を指示する言語現象。

典型的な換喩は文中の指示的位置におかれた名詞句に生じる。

- (3) a. (教室で) 眼鏡 (= をかけた人物) が黒板を凝視している。
b. (飲食店の近所で) くいにげしたかつ丼 (= を注文した客) をつかまえた。

これに対し、Ruiz de Mendoza and Hernández (2001) は、名詞述語文の述語の位置に非指示的 (non-referentially) な換喩が生じるばあいがあるといい、これを換喩の叙述的用法 (predicative use) とよんでいる。

(4) *She's a real brain* (=intelligence).

(Ruiz de Mendoza and Hernández 2001 : 323)

この用法では、本来固有の指示対象をもつ名詞の意味が、隣接関係 (e.g. 頭脳と知性) にもとづいて別の意味にかわる、意味の拡張が生じている。さらに、換喩の叙述的用法に類似した日本語の言語現象として、澤田 (2003) が示した「属性の階層における部分属性の意味の拡張」がある。澤田 (2003 : 45-6) は属性叙述の名詞述語文における述語名詞の属性として〈部類〉〈側面〉〈部分〉の階層構造が想定され、日本語の属性叙述の名詞述語文が基本的に〈部類〉〈側面〉をあらわす一方で、換喩による拡張によって〈部分〉でも名詞述語文がつかれることを指摘する。

- (5) a. 〈部類〉：彼は学生だ／富士山は日本で一番高い山だ
b. 〈側面〉：彼はなかなか怒らない性格だ／今日はいい天気だ
c. 〈部分〉：彼は面長だ／彼は {いつも、今日も} 青色のセーターだ／彼は真冬でも半ズボンだ。

このとき、澤田（2003）は述語名詞につきのような意味の拡張が生じると考え、その動機づけを換喩にもとめている。

- (6) 〈面長→顔が長い人〉〈青色のセーター→青色のセーター姿〉〈半ズボン→半ズボン姿〉

以上をふまえ、名詞述語文の述語名詞に生じる換喩現象について、本稿は「日本語の叙述的な名詞述語文の述語名詞に換喩は生じるのか」という問題について、メンタル・スペース理論の道具だてにもとづいた分析をおこなう。結論として、つぎのことをのべる。

- (7) a. 倒置指定文では主題名詞にも述語名詞にも換喩が生じうる。
 b. いわゆるウナギ文（奥津 1978）の解釈が主題名詞に生じた換喩によって成立するという説（瀬戸 1984、菅井 2003）や述語名詞に換喩が生じることで成立するという説（金水 2016）があるが、ウナギ文では主題名詞にも述語名詞にも換喩は生じていない。
 c. 措定文の述語名詞には換喩は生じない。英語には名詞述語文の非指示的な述語名詞にのみゆるされる換喩の用法（＝換喩の叙述的用法）があるが、日本語にはそのような用法はない。また、澤田（2003）が属性叙述文の部分属性が換喩による意味の拡張をおこすとみなした類型には換喩とはみとめられないものがふくまれている。さらに、措定文の述語名詞に隠喩や提喩によるカテゴリーの伸縮がみられるのに対し、換喩ではそのような伸縮はみられない。カテゴリー化した換喩由来の名詞は字義どおりの表現として、措定文の述語名詞になる。

3. 分析の道具だて

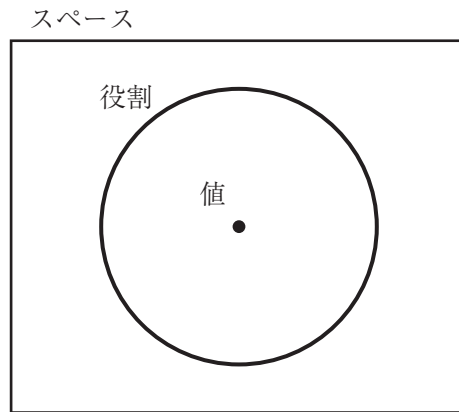
ここでは、具体的な分析にさきだち、まず、本稿で分析の道具だてとするメンタル・スペース理論（Fauconnier 1985, 1997）による名詞句指示のとらえかたをしめす。つぎにこの指示のモデルを拡張するかたちで換喩に指示対象のずれをもつ真性の換喩と、指示対象のずれをもたない換喩もどきがあることをしめす。最後に、メンタル・スペース理論の観点から、「A は B だ」型の名詞述語文を整理する。

3.1 メンタル・スペース理論による名詞句指示のモデル

「すべての Referential expression は役割と値をもつ」（井元 2006）という前提のもとに、メンタル・スペース理論では、名詞句による指示対象の限定を役割関数という関数モデルで定式化する。役割関数はつぎのような式でしめされる。

$$(8) R(M) = v \quad [R: \text{役割}, M: \text{スペース}, v: \text{値}]$$

役割とは内包をもったカテゴリーのことである。値とは名詞句の指示対象のことである。スペースとは空間や時間、個人の信念や一般的知識などのパラメーターである。これらの関係を図式的にしめすとつぎのようになる。



(図1：メンタル・スペース的にみた名詞句指示のモデル)

この図式を基盤として、役割がつくる関数にパラメーターとしてスペースが代入されることで値を出力することが、名詞句の指示であると考えられる。たとえば、「大統領」という名詞で説明すると、つぎのように標示することができる。

(9) a. 大統領（アメリカ，2017年）＝ドナルド・トランプ

b. 大統領（フランス，2007年）＝ニコラ・サルコジ

すなわち、「大統領」のような名詞は、スペースが変わることで異なる値を出力する関数としてとらえることができるのである。

3.2 メンタル・スペース理論による換喩による拡張的な指示のモデル

つぎに、メンタル・スペース理論からみた換喩による拡張的な指示のモデルにつ

いてのべる。換喩による指示の拡張は、役割関数のモデルを基盤として、そこにさらにアクセス原理がはたらくことによって、ふたつのカテゴリーがむすびつき、一方のカテゴリーの属性で、もう一方のカテゴリーの要素を限定するという現象が生じるものとする。

- (10) [アクセス原理] 二つの要素 a と b がコネクタ F によってリンクされていれば ($b = F(a)$)、要素 b はその対応物 a の名前か記述か、指さしかにより同定できる。(Fauconnier 1985 を翻訳)

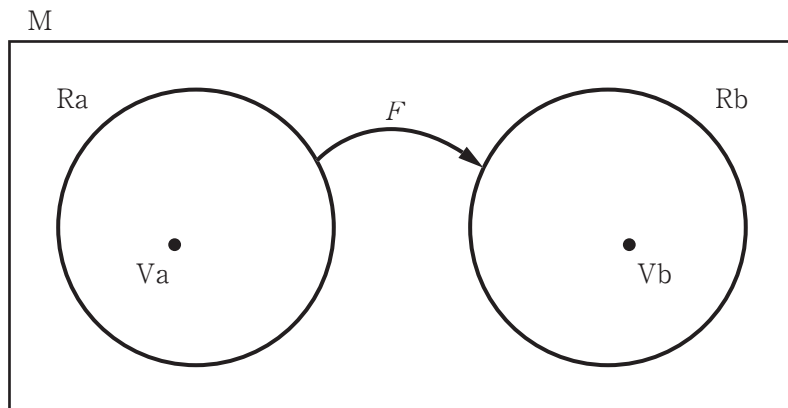
このとき、 a をトリガー、 b をターゲットという。コネクターには同一の対象をむすびつける ID コネクターや、社会的心理的關係性によってふたつのカテゴリーをむすびつける換喩コネクターがある。換喩現象にかかわるのは後者である。役割関数とアクセス原理の観点から先の (2) でしめた換喩の定義を、より厳密に定義しなおすと、つぎのようになる。

- (11) ある限定されたスペース M において、値 v_a をもち、トリガーとして文や発話に導入される名詞句の役割 R_a と、ターゲットとなる対象 v_b がおかれる潜在的な別カテゴリー R_b が語用論的コネクター F によってつながれているときに、 v_b を指定するために、 v_a の役割 R_a を借りることが換喩である。

この関係性はつぎのように定式化できる。

- (12) $F(R_a, M) = R_b(M)$

さらに、この関係を図式化するとつぎのようにしめすことができる。



(図 2: メンタル・スペース的にみた換喩のモデル)

ところで、従来の換喩研究において、ひとしなみに換喩のあつかいにさされてきた、拡張的な名詞句の指示をもたないタイプの表現類型（e.g. 全体で部分をあらわす類型や、容器で中身をあらわす類型、組織で責任者をあらわす類型、など）を、大田垣（2011）では「換喩もどき」として換喩から除外した。

- (13) a. 彼は電話をとった。
 b. ナベが煮えている。
 c. 村全体が喜んだ。

これらの例は、瀬戸（1997）などにおいて、換喩の主要な事例としてしめされてきたものである。それぞれ、「電話」で「受話器」を、「ナベ」で「ナベの中身」を、「村」で「村にいる人々」を「指示」しているとする。しかし、大田垣（2011,2013）で分析したように、関係節化や疑問詞疑問文によるテストなどによって、これらの例では語用論的コネクターによる拡張的な指示の拡張は生じていない。このような表現は、名詞の値がもつ側面のずれがあたかも換喩が生じているようにみえる言語現象であると考えられる。本稿では、このような名詞句が拡張的な指示の拡張をおこなわない類型は換喩の例からは除外して分析をすすめる。

3.3 メンタル・スペース理論からみた「AはBだ型」の名詞述語文

つぎにメンタル・スペースの枠ぐみもちいて「AはBだ」型の名詞述語文を整理する。この種の名詞述語文は、主題名詞と述語名詞がカテゴリーの包摂関係（＝タクソノミー）を形成できるか否かでおおきくふたつにわけることができる。

まず、主題名詞と述語名詞がタクソノミーを形成できる名詞述語文についてのべる。このタイプのひとつめとして、措定文（西山2003） [= 記述文（坂原1990）、帰属文（丹羽2006）] がある。

- (14) クジラは哺乳類だ。[措定文]

この文型は「vはRだ」という構造をもち、主題となる指示的な名詞に非指示的な述語名詞がもつ属性を付与する構文である。この文にあらわれる主題名詞と述語名詞は、「という」で連結することでタクソノミーの関係をしめすことができる²。

² 金水（1986）によれば、「という」は、この形式によってむすばれるふたつの名詞があらわすカテゴリーの包摂関係をあらわす。ただし、「太郎は病気だ」のような主題名詞の指示対象の一時的な状態を述語名詞があらわすものがある。この種の文はN1とN2がタクソノミーを構成しない。形容詞文と名詞述語文の間に位置する文と考えられる。

(15) クジラという哺乳類を知っていますか。

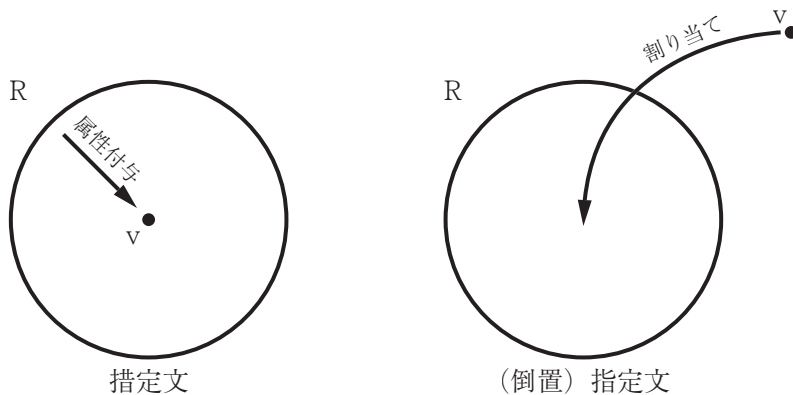
このタイプのふたつめとして、倒置指定文（西山 2003） [= 同定文（坂原 1990）、指定文（丹羽 2006）] がある。

(16) 世界最大の哺乳類はシロナガスクジラだ。[倒置指定文]

この文型は「Rはvだ」という構造をもち、主題となる名詞があらわす非指示的なカテゴリー³に、述語名詞があらわす値をわりあてる構文である。述語名詞と主題名詞がタクソノミーを形成でき、「という」でむすびつけられる。

(17) シロナガスクジラという世界最大の哺乳類を知っていますか。

以上の措定文と倒置指定文をメンタル・スペース理論の枠ぐみをもちいて図式化すると、つぎのようになる。



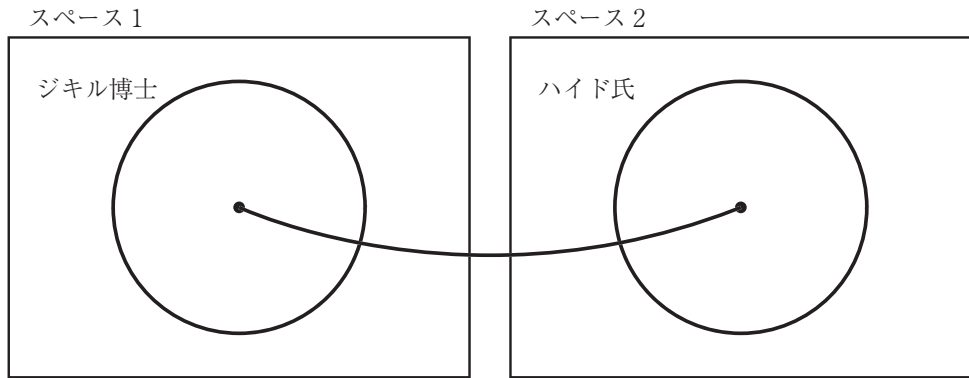
(図3：メンタル・スペース的にみた措定文と倒置指定文)

つぎに、主題名詞と述語名詞がタクソノミーを形成できない名詞述語文についてのべる。このタイプのひとつめとして、間スペース解釈（坂原 1990） [= 同一性文（井元 2006）] がある。

(18) ジキル博士はハイド氏だ。[間スペース解釈]

この文型は「v1はv2だ」という構造をもち、ことなるスペースに存在する個体どうしをID（=同一性）コネクターによってむすびつける構文である（図4）。この構文では主題名詞と述語名詞がタクソノミーを形成していない。

³ 倒置指定文の主題におかれた名詞は役割のみをもち、値を欠いている（井元 2006）。



(図4⁴:メンタル・スペース的にみた間スペース解釈)

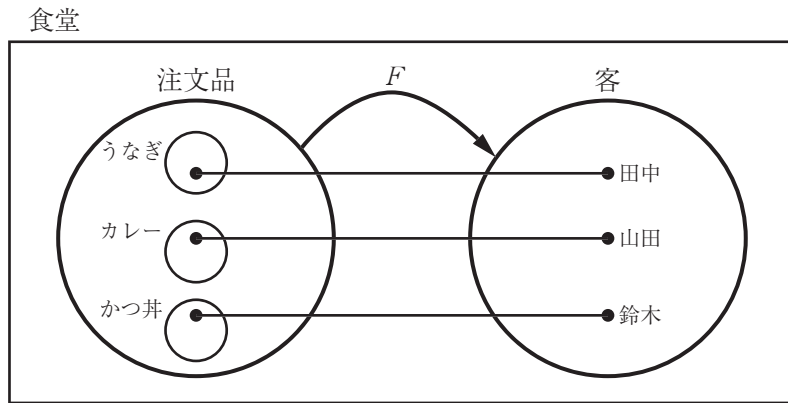
このタイプのふたつめとして、つぎにしめすような、ウナギ文(奥津1978)がある。

- (19) a. ぼくはうなぎだ。 [= 「ぼくはうなぎを注文する」という意味]
- b. 花子は男の子だ。 [= 「花子は男の子を育てている」という意味]
- c. 田中は京都だ。 [= 「田中は京都に住んでいる」という意味]

このウナギ文については、成立の動機づけを主題の名詞に生じる換喩にもとめる説(瀬戸1984、菅井2003)がある一方で、それを否定する西山(2003)の批判がある。菅井(2003)は「ぼくはうなぎだ」という文について、「ぼく」の意図された意味が「ぼくが注文したもの」と換喩的に解釈されると主張しているが、西山(2003)がおこなったいくつかのテスト(代名詞の照応、量子子・数量詞の振る舞い、同一対象指示の名詞句による置換の許容性、倒置可能性)からも判断されるように、主題の位置に換喩による指示の拡張がおこなわれているとは考えにくい。一方、金水(2016)は西山の議論を考慮にいれながら、ウナギ文の述語名詞に換喩が生じる可能性を指摘している。また、Fauconnier(1985)の訳者は、巻末の解説でウナギ文をとりあげており、ウナギ文成立の動機づけとして、主題名詞と述語名詞の指示対象を単純にIDコネクターでむすぶモデルを提案している。これらの多

⁴ 「(このドラマでは、)アルセーヌ・ルパンはダン・ドレジーだ」といった倒置指定文が可能であることから、メンタル・スペース理論では、固有名詞をいかなるスペースにおかれても単一の値を限定するカテゴリーであると考え(井元2006:21)。

様なウナギ文の解釈についての議論に対し、本稿はウナギ文においては主題名詞にも述語名詞にも換喩は生じていないと考える。ウナギ文は、間スペース解釈とおなじく、カテゴリーの包摂関係をなさない名詞どうしでつくられる名詞述語文である。しかし、ウナギ文における主題名詞と述語名詞の解釈のメカニズムは、主題名詞や述語名詞のどこかに換喩による指示の拡張が生じるものではなく、語用論的コネクターによる対応と、要素間の対比の関係を背景として、値をもった役割どうしに対応づけられている状態をメタ的にしめしたものであると考える（大田垣2017）。たとえば、「ほくはうなぎだ」という文は、とある食堂で客というカテゴリーの値として「田中、山田、鈴木」が存在し、それぞれが注文品として「うなぎ、カレー、かつ丼」などを注文したときに構築されるメンタル・スペース上の対応関係を、田中の視点から「山田はカレーだ、鈴木はかつ丼だ、ほくはうなぎだ」のように述べたものであると考えられる（図5参照）。このとき、文中の名詞のどこかに換喩による間接的な指示の拡張が生じたり、個体どうしが同一物としてコネクターでむすばれたりするわけではない。



（図5：ウナギ文が成立する状況モデル）

以上具体的な分析にさきだち、名詞句の指示と換喩による拡張的な名詞句の指示、「AはBだ」型の名詞述語文の構造について、メンタル・スペース理論の枠組みをもちいて整理した。

4. 分析

ここからは、日本語の名詞述語文の非指示的な述語名詞に生じる換喩の成立可否について考察をおこなう。分析の手順として、まず、名詞の指示性、すなわち当該の名詞が指示対象をもつかどうかに注目しながら、日本語の名詞述語文における換喩のあらわれかたを観察する。つぎに、措定文の述語名詞に注目し、英語における「換喩の叙述的用法」が日本語の措定文の述語にも生じうるかを検討する。さらに、澤田（2003）が指摘した「属性叙述の階層における部分属性の意味の拡張」が措定文の述語名詞に生じる換喩といえるのかどうかを検討する。

4.1 名詞述語文における名詞の指示性と換喩の成立可否

さきにのべたように、メンタル・スペース理論によって精緻化するとき、名詞句の指示的位置に生じる換喩は「ある限定的なスペースにおいて語用論的コネクターを介して、ある対象をそれが属するカテゴリーとはことなるカテゴリーがもつ属性をもちいて指示する言語現象」と規定することができる。この考えをふまえると、つぎの例にしめすように換喩は、文中の指示的な位置にあらわれると考えられる。

(20) [地震後の書店で] プラトン (=プラトンの本) と ソクラテス (=ソクラテスの本) が床にころがっている。

では、名詞述語文においてはどうかだろう。こころみに、以下の倒置指定文を観察してみると、指示的な位置である述語名詞にも、非指示的な位置である主題名詞にも換喩が生じることがわかる。

- (21) a. 太郎がさがしている本は、プラトンだ。[倒置指定文の述語名詞]
 b. [書店で] 客：すみません、プラトンはどれですか。／店員：ああ、プラトンは、あの赤い本です。[倒置指定文の主題名詞]（西山2003：327）

(21a) の例では、倒置指定文の述語名詞に換喩が生じている。倒置指定文の述語名詞は指示的位置にあり、換喩による拡張的な指示が生じていても、述語名詞は主題名詞にわりあてられる値としてはたらいっている。また、(21b) の例では、非指示的な位置である倒置指定文の主題に換喩が生じている。このとき、換喩のターゲットとなる潜在的なカテゴリーは、語用論的コネクターによってトリガーがあらわす

カテゴリーと値をもたない状態で接続され、述語名詞があらわす値がわりあてられていると考えることができる。このように、倒置指定文にかぎって考えれば、換喩は名詞述語文の指示的な位置にも、非指示的な位置にも生じるようにみえる。

4.2 措定文の述語名詞に換喩は生じるのか

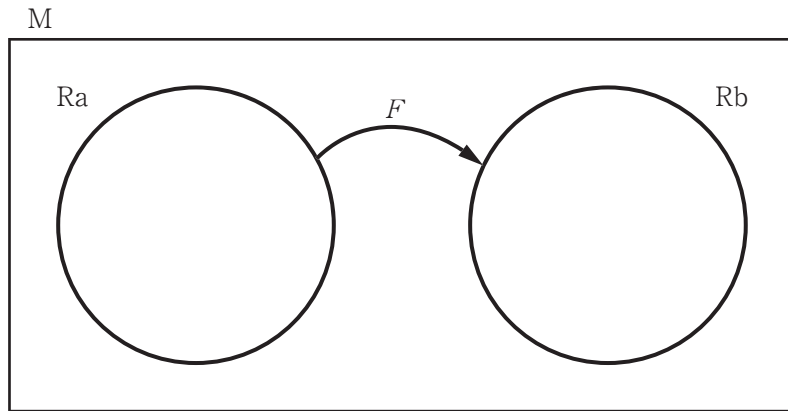
しかしながら、日本語のすべての名詞述語文の非指示的な位置に換喩が生じうるかについては、検討の余地がのこる。これは、措定文の述語名詞のふるまいを観察したときに明らかになる。この問題について、まず、措定文のような叙述的な名詞述語文の述語名詞に換喩が生じうると考える先行研究について検討したい。叙述的な名詞述語文の非指示的な述語名詞に換喩が生じるとする先行研究には、Ruiz de Mendoza and Hernández (2001) や澤田 (2003) がある。Ruiz de Mendoza and Hernández (2001) によると、英語では叙述的な名詞述語文の述語名詞に換喩が生じ、“a real brain” が “intelligence” をあらわすことがあるという。

(22) *She's a real brain.* (Ruiz de Mendoza and Hernández 2001 : 323)

これに類似した指摘として澤田 (2003) は、換喩による拡張によって、叙述的な名詞述語文の述語名詞において〈部分〉をあらわす名詞が名詞述語文をつくることができるという。

(23) 彼は面長だ／彼は {いつも、今日も} 青色のセーターだ／彼は真冬でも半ズボンだ。(澤田 2003 : 45-6)

(23) の例では、「面長」で「顔が長い人」、「青色のセーター」で「青色のセーター姿」、「半ズボン」で「半ズボン姿」をあらわす換喩が生じているという。彼らの主張にしたがえば、これらの例は述語名詞が非指示的なものであっても、換喩が生じていることになる。これをメンタル・スペース的な観点からモデル化するとつぎのようになるだろう。すなわち、語用論的コネクターを介した指示の拡張を背景とし、倒置指定文にみられたような間接的な指示そのものは生じていないが、値を欠いたふたつのカテゴリーの語用論的コネクターによる接続、つまり、「メタレベルの言明としての換喩」が想定され、カテゴリーの拡張 (e.g. “a real brain” で “intelligence”、「面長」で「顔が長い人」) が生じている、と考えるのである (図6)。



(図6：メタレベルの言明としての換喩)

しかしながら、このようなカテゴリーの拡張が英語における換喩の叙述的用法に合致するものなのか。そして、日本語の措定文の非指示的な述語名詞に実際に生じるかどうかはうたがわしい。この問題に対し本稿は、英語には非指示的な述語名詞にしか生じないメタレベルの換喩用法、すなわち換喩の叙述的用法があるのに対し、日本語にはそのような用法は存在しないと考える。さらに、澤田(2003)が換喩による意味の拡張と考える例には換喩とはみとめられないものがふくまれていると考える。

まず、英語には換喩の叙述的用法があるのに対し、日本語にはそのような用法は存在しないことについてのべる。英語における換喩の叙述的用法は、非指示的な述語名詞のみにゆるされる用法である。これに対し、日本語における換喩は指示的位置に生じるものと非指示的位置に生じるものとがパラレルな関係になっており、おなじ名詞を任意の位置で使用することができる。たとえば、つぎのテストからわかるように、英語の名詞述語文において、換喩の叙述的用法にあらわれる名詞は指示的位置に生じる換喩表現としては使用できない。

- (24) She is a real brain.[?] And, *this real brain* received an award for remarkable achievements in the field of education.

これは、“intelligence”の意味で使用される“a real brain”が値をもったカテゴリーではなく、属性そのものをあらわし、述語位置にのみあらわれる形式として使用さ

れていることをしめしている。一方、日本語の換喩表現においては、英語のような述語位置専用の形式はなく、文中の指示的位置であっても非指示的な位置であっても、おなじ名詞を使用することができる。

- (25) 次郎が電車にのると、メガネがスポーツ新聞をよんでいた。次郎はその男をみて、「あ、昨日日本屋でみかけたメガネだ」とおもった。

また、翻訳の観点からみたばあい、英語において非指示的な述語名詞にのみみとめられたカテゴリ拡張の用法は、日本語の述語名詞では奇妙な表現や、別の比喻や、意味の拡張がおこらない字義どおりの属性になる。たとえば、“*She’s a real brain.*”という文をそのまま「彼女は真の〔頭、頭脳〕だ」と訳しても不自然な文になる。さらに、非指示的な述語名詞として「頭脳」が使用される日本語の実例としてつぎのようなものが確認できたが、いずれもメタフォリカルな用法や、頭脳そのものについて言及する字義どおりの表現であり、非指示的な名詞におけるメタレベルでの換喩は生じていない。

- (26) a. 今では安達幸之助は無名の人物であるが、大村のもう一つの頭脳であり、生きていれば「近代軍隊の実質的な生みの親」として歴史に名を残したはずである。(磯田道史『武士の家計簿』)
- b. このあたりには、物事の空間的・論理的関係の理解をつかさどる頭頂連合野がある。ここはいわば理科的な頭脳である。(山本健一『脳とこころ』)

以上のことから、日本語には英語にみられるような非指示的な述語名詞にのみみられる換喩の用法は存在しないと考えられる。

つぎに、澤田(2003)が換喩による意味の拡張と考える例には換喩とはみとめられないものがふくまれていることについてのべる。澤田(2003)がしめした(23)の類型は、換喩の叙述的用法に類似した日本語の言語現象のようにみえる。さきへのべたように、倒置指定文に関しては、述語名詞が指示的であっても非指示的であっても、換喩は生じうる。しかし、澤田(2003)において換喩が生じていると主張された文は倒置指定文ではなく、叙述的な名詞述語文である(=澤田のいうところの「属性叙述文」)。そして、そこにあげられた属性叙述文の述語名詞にあらわれる部分属性には、メタレベルとして生じる換喩すらも想定できないものがふくまれ

ている。その根拠としてつぎのふたつのことが指摘できる。まず、「面長」という例は字義どおりの表現であって換喩ではなく、「顔が長い」という属性をあらわしているにすぎない。なぜなら、この名詞は属性そのものをあらわす名詞であり、さきにしめた「かつ井」や「メガネ」のような独立した指示対象をもたない。したがって、独立した指示対象から語用論的コネクターを介して別の対象を指示することがなく、文中の非指示的な位置でこれを背景としたカテゴリーの拡張も生じない。すなわち、日本語において属性のみをあらわす名詞には換喩は生じない、ということがいえる⁵。つぎに、措定文の述語名詞として、「青色のセーター」や「半ズボン」が使用される例について考察する。これらの例は、ある限定された状況を出発点として、主題名詞と述語名詞の対応関係によって、「彼はいつも青色のセーターをきている」「彼は真冬でも半ズボンをはいている」といったしかるべき解釈がみちびかれている。これらは、さきにしめたウナギ文とおなじ構造であって、「青色のセーター」や「半ズボン」でもって述語名詞の値を間接的に指示するという関係をあらわしているわけではない。したがって、これらの例の述語名詞には語用論的コネクターを背景としたカテゴリーの拡張も生じていない。

以上、英語にみられる換喩の叙述的用法が日本語にはみられず、澤田（2003）が指摘する例も、措定文の述語名詞に換喩が生じているとは認められないことを述べた。最後に、上記以外の枠ぐみでメタレベルでの換喩が措定文の述語名詞に生じうるかどうかについて考察したい。ここで分析の余地がのこる現象として、措定文の述語名詞がなんらかのキャラクター属性をあらわす現象と、カテゴリー化した換喩由来の名詞が措定文の述語名詞になる現象をあげることができる。

まず、措定文の述語名詞になんらかのキャラクター属性が発現する事例について観察する。「あいつはRだ」のような叙述的な名詞述語文の述語名詞には比喩によ

⁵ 属性そのものをあらわす名詞が換喩のようにみえる理由としては、レトロニムの限定修飾要素のひとりあるきが考えられる。レトロニムとは、社会状況の変化によって下位カテゴリーを相対化してしめさなければならなくなった名詞である（e.g.「携帯電話」に対する「固定電話」）。このレトロニムの限定修飾要素が文中に単独であられることが、換喩にみえることがある（e.g. ケータイで電話する）。しかし、レトロニムの限定修飾要素は、意味論的には通常表現において値をもった単一のカテゴリーとして文にあらわれうるかどうか、また形態論的には自由形態素か拘束形態素かという点で換喩の属性とは区別されると考える。

る意味拡張を背景としたキャラクター属性が発現することがある。これは、おもに隠喩と提喩によってひきおこされる。

(27) a. [成人男性に対して] あいつは坊っちゃんだ。[隠喩]

b. あいつは男だ。[提喩]

(27a) の例は、隠喩によって述語名詞「坊っちゃん」の意味が、〈目上や他人の男子〉という字義どおりの意味から、〈幼児性のぬけない男性〉という意味に転換している。これは、ふたつの意味がそれぞれあらかずカテゴリーの間に共通するスキーマ(=類似性)があり、その類似性をコネクターとした意味の派生が生じていると考えられる。これは、まさに隠喩においてはメタレベルにおける換喩で想定された方略によるカテゴリーの拡張が成立していることを示唆している。このときターゲットになるカテゴリーではトリガーとなるカテゴリーがもつ属性が保存されている。また、(27b) の例は、提喩によって「男」という述語名詞があらわすカテゴリーの意味が、このカテゴリーの下位カテゴリーがもつ属性である〈男らしい男〉という限定されたものに縮小していることをしめしている。提喩の例においても、ふたつのカテゴリー(このばあい、包摂関係にあるカテゴリー)のあいだで意味の転換現象が生じている。これに対し、つぎのように措定文の述語名詞に換喩が生じた結果、それがキャラクターを表現しているようにみえる事例がある。

(28) あいつはメガネだ。

この文では、措定文の述語名詞の位置に換喩が生じ、「メガネ」という語が「メガネをかけた勤勉な人物」といったキャラクターをあらわしているようにみえる。しかし、このような表現において、述語名詞の位置にメタレベルの換喩が生じているかはつぎのような表現が不自然であることから考えて、不透明である。

(29) あいつはメガネだ。[?]メガネ(と)は勤勉な人物のことだ。

むしろ、このような文がキャラクターをしめすメカニズムは、文レベルにおける逆転的な因果推論にあると考えられる。すなわち、この文における述語名詞「メガネ」はあくまで字義どおりにメガネをあらわしており、「あいつはメガネだ」という文は「あいつはメガネをかけている」といった事態をあらわす。そこから、「あいつはメガネをかけているから、勤勉である」といったキャラクター属性がみちびきだされるのである。このような推論は、順序としては誤りである。正しい推論の

順序としては「あいつは勤勉であるから、その結果、視力がさがり、メガネをかけている」ということになる。しかし、このような推論が社会に定着したときに、「メガネをかけていれば勤勉である」といった逆転した因果関係における前提部分「メガネをかけている」がキャラクターを発現させる形式として使用されるようになるものと考えられる。

つぎに、カテゴリー化した換喩由来の名詞が措定文の述語名詞になる現象についてのべる。まず、つぎの文を参照されたい。

(30) しゃぶしゃぶは冬になると無性にたべたくなる鍋だ。

この文の述語名詞「鍋」は、換喩によって本来、料理に使用する容器が、その料理をあらわす語として定着したものである。このようなカテゴリー化した換喩由来の名詞は、ターゲットの領域に属するカテゴリーそのものをあらわす語として使用することができる。

(31) {カレー、うどん、鍋} という料理

このような名詞は、由来が換喩であっても、もはや語用論的コネクターによる拡張的な指示は生じておらず、字義どおりの表現として措定文の非指示的な述語名詞として使用することができる。

5. おわりに

本稿は、メンタル・スペース理論の枠ぐみを足がかりに、名詞述語文と換喩との関係性について考察をおこなった。具体的には、日本語の名詞述語文の類型をメンタル・スペース理論の観点から整理し、名詞の指示性の観点からそれぞれの名詞述語文の主題や述語名詞に換喩が生じるかどうかについて分析した。特に、措定文の述語名詞に換喩が生じるかどうかについて、Ruiz de Mendoza and Hernández (2001) や澤田 (2003) の指摘を批判的に検討した。結論として、つぎのことをあきらかにした。

(32) a. 倒置指定文では主題名詞にも述語名詞にも換喩が生じうる。

b. いわゆるウナギ文 (奥津 1978) の解釈が主題名詞に生じた換喩によって成立するという説 (瀬戸 1984、菅井 2003) や述語名詞に換喩が生じることで成立するという説 (金水 2016) があるが、ウナギ文

では主題名詞にも述語名詞にも換喩は生じていない。

- c. 措定文の述語名詞には換喩は生じない。英語には名詞述語文の非指示的な述語名詞にのみゆるされる換喩の用法があるが、日本語にはそのような用法はない。また、澤田（2003）が属性叙述文の部分属性が換喩による意味の拡張をおこすとみなした類型には換喩とはみとめられないものがふくまれている。さらに、措定文の述語名詞に隠喩や提喩によるカテゴリーの伸縮がみられるのに対し、換喩ではそのような伸縮はみられない。また、カテゴリー化した換喩由来の名詞は字義どおりの表現として、措定文の述語名詞になる。

付記

本稿は、筆者が日本語文法学会第13回大会（2012年10月28日、於名古屋大学）で発表した内容を再検討し、精緻化したものである。

参考文献

- 井元秀剛（2006）：「コピュラ文をめぐる名詞句の意味論と語用論」『シユンポシオン 高岡幸一教授退職記念論文集』13-22, 朝日出版社。
- 大田垣 仁（2011）：「換喩と個性——名詞句単位の換喩における語用論的コネクターの存否からみた——」『待兼山論叢』45, 21-36, 大阪大学文学会。
- （2013）：「換喩もどきの指示性について」『語文』第100・101輯, 1-14, 大阪大学国語国文学会。
- （2017）：「換喩と種差——換喩使用の目的と条件——」『語文』第109輯, 1-19, 大阪大学国語国文学会。
- 奥津敬一郎（1978）：『「ボクハ ウナギダ」の文法——ダとノ——』, くろしお出版。
- 金水 敏（1986）：「名詞の指示について」『築島裕博士還暦記念国語学論文集』, 467-90, 明治書院。
- （2016）：「「ウナギ文」再び——日英語の違いに着目して——」『名詞類の文法』（福田嘉一郎/建石始 [編]), 203-14, くろしお出版。
- 坂原 茂（1990）：「役割, ガ・ハ, ウナギ文」『認知科学の発展』3, 29-66, 講談社。
- 澤田浩子（2003）：「属性叙述における名詞述語文」『日本語教育』116, 39-48, 日本語教育

学会.

- 菅井三実 (2003) : 「概念形成と比喩的思考」『認知言語学への招待』(シリーズ認知言語学入門1, 辻幸夫編), 127-82, 大修館書店.
- 瀬戸賢一 (1984) : 「「僕はウナギだ」のレトリック: ウナギ文はどこへ行くのか」『大阪経大論集』159-161, 1029-63, 大阪経済大学.
- (1997) : 『認識のレトリック』, 海鳴社, (瀬戸 1986『レトリックの宇宙』, 海鳴社を改訂したもの)
- 田窪行則 (1992) : 「「かつどんが食い逃げをした」<語用論的関数と同定原則>」『言語』1992年6月号, 28-31, 大修館書店.
- 西山佑司 (2003) : 『日本語名詞句の意味論と語用論』, ひつじ書房.
- 丹羽哲也 (2004) : 「コンピュータ文の分類と名詞句の性格」『日本語文法』4-2, 136-52, 日本語文法学会.
- (2005) : 「名詞述語文, 形容動詞述語文, ウナギ文」『日本語科学』18, 5-24, 国立国語研究所.
- (2006) : 『日本語の題目文』, 和泉書院.
- Fauconnier, G. (1985) : *Mental Spaces*, Cambridge University Press.
- (1997) : *Mappings in Thought and Language*, Cambridge University Press.
- Ruiz de Mendoza Ibáñez, F. J. and L. P. Hernández (2001) : Metonymy and the grammar: motivation, constraints and interaction, *Language & Communication* 21, 321-57.

用例出典

日本語の実例データは国立国語研究所が開発した『現代書き言葉均衡コーパス』から抽出した。